The Whisper from Amherst

エミリィのささやき

エミリィの詩の中で、これほど始めから終わりまで、悲しいものを悲しい、美しいものを美しいと表現している詩が他にあるでしょうか。ゆったりと一語一語かみしめながら読むことのできる詩です。

‘As imperceptibly as Grief’

As imperceptibly as Grief.	悲しみのようにひそやかに
The Summer lapsed away—	夏が過ぎて行ったー
Too imperceptible at last	ついにあんまりひそやかなので
To seem like Perfidy —	背信とは思えぬくらい ー
A Quietness distilled	ある静けさがにじみ出てきた
As Twilight long begun,	すでにもうとっくに始まっている
	たそがれのように、
Or Nature spending with herself	あるいはひとり引きこもって
Sequestered Afternoon —	午後をすごす自然のようにー
The Dusk drew earlier in —	夕暮れは前より早くたれこめてきたー
The Morning foreign shone —	夜明けはよそよそしく輝いたー
A courteous, yet harrowing Grace,	立ち去ろうとする客のように、
As Guest, that would be gone —	丁重な、しかし胸しめつける優美さー
And thus, without a Wing	このように、翼もなく
Or service of a Keel	船の便もなくて
Our Summer made her light escape	わたしたちの夏は軽やかに逃げて行った
Into the Beautiful.	「美しきもの」の中へ。

（岩波文庫「対訳『ディキンスン詩集』」 亀井俊介 編より）